幸福について

福原麟太郎

新潮社

幸福について

昭和四十七年四月五日印刷
昭和四十七年四月十日発行

著者　福原麟太郎

発行者　佐藤亮一

印刷　東洋印刷株式会社

製本　共同製本株式会社

発行所　株式会社　新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号　一六二

電話東京（〇三）三二六〇―二二一

振替東京　八〇八番

定価一一〇〇円

乱丁・落丁本はお取替えいたします

© Rintaroh Fukuhara Printed in Japan. 1972

幸福について　目次

I

幸福について　8
シェイクスピアの人間観　24
シェイクスピアの時代　26
シェイクスピアの史劇　30
シェイクスピア劇の解釈　41
クレシダは消える　49
オセロ　56
シーザー所懐　58
「ロミオとヂュリエット」　60
喜劇を観る楽しみ　63

II

イギリスの旅行　70
ロンドン塔　77
スコットランドの記憶　81
イギリスの雪　86
平田禿木の南英　89
留学生　96
漱石と英国風景画　100
*
わが自然　104
柿日和　115
子供の季節　117

ちかごろのこと 118
秋空晴れて 121
*
欧米人と能楽 124
能・フェノロサ・禿木 127
梅若舞台で 132
能楽演出の新しい一方面 135
九段の縁 137
二十数年のむかし 138
菊・吉じいさん 141
演劇随想＝名作・名舞台 144

III

漱石解説への一つの試み 156
ある英学者 172
『新文藝』 174
ある先生のこと 180
治まる花の都 184
深瀬基寛氏 190
杉山誠氏 193
西脇順三郎氏 196
サミュエル・ヂョンソンのこと 206
サー・ハーバート・リード来日 215

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

*
小泉信三氏の思い出 220
恋愛文学の手法 225
小林秀雄氏 227
「これは新しい」 229
谷崎潤一郎 231
文体革命の時代 235
西欧詩抄の思い出 238
なずなとむくげ 242
河上大人のこと 244
花の姿 248
岩田さんのこと 250
大塚界隈 251
さまざまの思い出 253

*
年鑑 256
史伝の美しさ 259
綱島梁川 263
『年年歳歳』 264
ひとつの出現 265
本を買う話 266
本を読むとき 269
読書の楽しみ 270

IV
愚人を愛する心 274
塩焼く煙 277
帰省 279

慶応外国語学校 282
夏のたより 284
かくし芸大会 287
銀座のお母様がた 292
わたくしの京都 295
会いたい人 298
土の性 301
床やさん 304
偏見について 309
おたいくつさま 312
優雅な生活 313
祖国よ、幸多かれ 315
＊
文学の学問 318
人道主義と象徴 322
文体への執心 326
留学論 329
学問のすがた 332
「学問」はどこへ行ったのか 336
稀覯本の条件 346
英国出版印刷の展示会 352
明治、大正以来の外来文化史 356
百年の回顧 364
＊
あとがき 369
＊
発表掲載誌紙一覧 370

幸福について

装画　船坂芳助
口絵写真　鈴木忠雄

I

幸福について

1　シェイクスピアの世界

「千万の心を持つ」といわれたシェイクスピアは、幸福ということについてどう思っていたであろう。彼についてそういうことを調べるには、作品しか材料はない。E・K・チェイムバーズの年表に従って、わが国でよく知られている作を順次とりあげて感想を述べる。

『リチャード三世』は先年、わが国でも上演されたが、序幕三十行目で、後のリチャード三世が「おれは悪党になる決心だ」と宣言する悪逆無道の芝居である。幸福というものなど、とても考えられないほど激しい変転のうちにリチャード三世は「馬を引け、馬を引け、馬を持って参るものには王国をくれてやろうぞ」と言って引込むのが最後である。しかし王にもイーリーの僧正に向って、あわただしい政変のまっただ中で「君の邸の庭にはうまいイチゴがあったね」と話しかける、よく眠れた日もあった。彼にとって、幸福はどこか生活の片すみにひそんでいるものでしかなかったろう。事実は日夜、王位をねらって大幸福を目ざしていたのであった。

『ロミオとヂュリエット』が、その翌々年あたりの作で、わが国では明治の初めからよく知られてい

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

た。イタリアの伝説を借りた作だが、ああいう純粋な恋愛は、人生の幸福などという平常のものでなく、それ自身がいつ消えても幸福だと考えるのが普通であろう。そして、こわれ砕けることによって美しさを増す。この芝居も結局はそうなったが、シェイクスピア自身は、恋愛の破局という結末を偶然の運命に結びつけている。

『ロミオとヂュリエット』の幸不幸を支配しているものは偶然なのである。偶然によって行きちがいが重なって、二人とも死んでしまう。シェイクスピアは人生に偶然の運命があることを信じていたかのごとくで『ハムレット』でも敵討ちをとげるのは偶然である。

次の年には『夏の夜の夢』が書かれるが、シェイクスピアは偶然の幸福を、もう一段と偶然のものにする。この芝居では、四人の男女が恋愛の追っかけっこをし、疲れて森に寝てしまう。妖精パックのいたずらで、目がさめた時、最初に見た人を恋するという恋草の汁を目に注がれ、ディミートリアスという青年は、目を開くと見た娘、かねてきらいであったヘレナを恋するようになるが、恋草の汁の夢幻のききめがきいたまま芝居がすむ。シェイクスピアは、この青年の夢を現実に戻すのを忘れたのか、それとも、わざと目を覚まさせなかったのかわからない。しかし、現在残っているテクストではたしかにそうなっている。『夏の夜の夢』という芝居自身が、夢か現実か区別できないという感じがあるのに、ここでは本当に区別がなくなっている。もし意識してこういう運びにしたのであったとすれば、シェイクスピアは、明らかに、結婚などというものは夢を見ているようなものだ、人生の幸福そのものが夢だという皮肉な考えを披露していることになる。

シェイクスピアが自分の最後の作として世に問うた作は『あらし』であるが、あの中でも、シェイクスピアは、プロスペロの口をかりて、「われわれは夢が作られる材料で、われわれの小さな人生は眠りに取囲まれているのだ」と言っている。人生を舞台にたとえた例は、『お好み次第』にも『マク

ベス』にも出てくるが、そういうのを読んでいると、シェイクスピアにとって、人生の幸福などというものは、空の空なるもので、「人生には出がある、引込みがある」その間にほんの数年、人間は人生という舞台の上でばたばたやっているだけのことだと、心の底では、はっきり考えていたのではないかと思われるのである。

2　アントーニオの退屈

たぶん『夏の夜の夢』の次のシーズンに『ヴェニスの商人』が書かれ、上演されたとしてよいらしい。このあたりから、シェイクスピアの喜劇史劇時代に入るのである。一五九五年から一六〇〇年までのころで、彼としては最盛期である。作者で役者で株主である。英国の中部から出て来た人だそうだが、仕合せなお方だと、人々は噂していたであろう。

『ヴェニスの商人』で面白いことは、第一幕第一場でアントーニオという、いわゆる「ヴェニスの商人」が、劈頭、

「非常に退屈なんだ。なんだか悲しくてしようがない。人生にくたびれている。どうしてこういうことになったんだか、全くわからない」

と歎息していることだ。エリザベス朝の舞台は能舞台のような構造であったから、幕を引くとか落すとかいうことはなかったが、やがて第二場になると、すでに場面はヴェニスからベルモントへ変っている。ポーシャという美しいお嬢さんが、いきなり、

「本当に、わたしのこの小さな身体は、この大きな世の中に厭きて退屈してしまった」

と、同じようなことを言っている。

アントーニオがユダヤ人シャイロックから、胸の肉一ポンドを賭けて三千ダケットという金子を借りる。ポーシャを恋している友人バッサーニオを助けて、その恋を成就させたいからである。ポーシャもひそかに男装して、アントーニオのために弁論をふるってシャイロックを撃破し、ついに恋愛を成功させる。

幸福に満ちた話なのだ。それがどうしてヴェニスでもベルモントも退屈なのか解らない。第五幕はことに幸福である。月が照り星の輝く屋外で、幾組もの男女の踊りさんざめくフィナーレになるのだが、どうして彼らは、世の中に退屈していたのであろう。ヴェニスは悪の都、ベルモントは善の都という区別までしてある。

『ヴェニスの商人』は今は、特にわが国では、シャイロックの悲劇みたいなものになったから、われわれの見るあのシャイロック芝居と、シャイロックをにくんでいたエリザベス朝人の見たヴェニスの商人の芝居とは違っているかも知れないが、シャイロックを除けば、これがシェイクスピアの精一杯に幸福な芝居かも知れない。いま述べた第五幕の美しさ、よろこばしさが、それを語っている。シャイロックの娘ヂェシカはヴェニスの青年ロレンゾと駆落ちして恋を遂げる。実に愛すべき芝居になっているのだ。

けれども、何かしら心にかかるものがある。それが、正体をはっきり現わさない。悪の都、善の都の区別は、総体において童話劇的構成を持っているこの脚本の額ぶちだと考えてよろしいのであろうが、その他、種々の左右相称的人物やセリフや事件の配置を、その童話的意匠のうちとしても、なお、気にかかるものがあるのは、われわれのあまのじゃくで、みんな幸福になってしまっては、人生は面白くないということなのか。シャイロックをにくむ観衆なら、シャイロックがいじめられても、それは、不幸な悪人が退散するだけの話なのである。ほかがみんな幸福になってしまっては、それはみん

ながが幸福でないということよりも、かえって物憂いことである。退屈な憂鬱なことなのだ。――そういうパラドックスをシェイクスピアは考えていたのであろうか。そうだとすれば、芝居の始まったときと芝居の終ったときと、世界は同じなのだ。

シェイクスピアは劇の始めの方でいつもテーマ・メロディーを示すのが例だから、アントーニオとポーシャの憂鬱は、この劇のテーマだと考えてもよい。文芸復興期の幸福には、憂鬱退屈の霧がかかっていたのか。

3　フォールスタフの悟り

せんころ日生劇場でやっていた『ヘンリー四世』は『ヴェニスの商人』の翌年の作と考えられている。あの中にはフォールスタフという色好みの、ほら吹きの、のんだくれの老騎士が出て来て、皇太子ハルの遊び友達になっているが、この不良老年は、不思議な人生の悟りを開いているらしい。それを見のがすことはできない。善悪不二というのであろう。そもそも、善悪というような価値観の世界に彼は住んでいない。幸福について言えば、彼はのべつ幸福である。

幸福であったろうと想像するが、幸福などというものを認めていないかも知れない。しかし、こういう巨人はしあわせである。道徳の世界にいないのだから、道徳律の範疇の牽制を受けない。無法人である。無法人の幸福というのは何であろう。そんなことおれが知るものか、と答えるであろう。

ただ、彼のいる世界は、やはり道徳律のある世界だから、彼の思うままに振舞うといっても、いろいろ俗世の故障がある。しかし彼は、良心のとがめなしに、あらゆるずるいことをして口腹の欲をみたし、卑怯未練の行いをして自分の身体、生命を守っている。そして、天空海濶に人生を楽しんでい

る。いかにも自由人だが、おそらく人間に生れたということだけが彼の根本的障害であろう。人間であること自身が幸福でなければ、本当の幸福とは言えないというところまで追いつめられると、いやまあおれを論じるな、おれはおれだ、と考えるであろう。

しかし、道徳の世界にいるものから見ると、彼はうらやましい無法人で自由人である。しかもシェイクスピアは、彼の傍若無人のために損害をうけるのは結局彼自身である、というふうに彼をうごかしている。彼が人気者で、愛され、さらに観客からにくまれないゆえんであると、批評家たちは説明している。しかし、それは戯曲作法上の問題に過ぎないとも言えよう。もし、最もよく彼の行為が彼の形成を語っているところがあるとするならば、『ヘンリー四世』第二部の終りで、皇太子がヘンリー五世に登位したとき、いよいよおれたちの日が来たぞ、と彼が彼の一味の無頼漢どもをひきいてウエストミンスター大寺院の前に、新王を迎える場面である。フォールスタフは「おおい、若いの、万歳」とどなる。新王は眉をも動かさず「朕は、そのような汚ならしい老人を知らぬ」という意味の言葉を返して通り過ぎてしまう。フォールスタフは、投獄され、心臓をわずらって死んでしまう。そこを、私の尊敬する評家はこう言っている。

「フォールスタフは皇太子が王位につくと聞いたとたんに、現在の瞬間に生きるという彼の本領を忘れた。彼は未来を見はじめ、野心を抱くに至ったのだ」

彼は、無法人の翼を落してしまったのである。彼の幸福はここで終ったのだ。

この偉大なる堕天使を創作したシェイクスピアは、そのころ盛んな創作欲に襲われていたらしい。それとも芝居が流行して、作者たる彼は多忙を極めていたというのか。一五九九年から一六〇〇年にわたるシーズンには『ヂュリアス・シーザー』『お好み次第』『十二夜』という三作を発表している。わが国でよく知られている作は『ヂュリアス・シーザー』であろうが、シーザーないしブルータス

ないしアントニーあるいはキャシアスについて、幸福の問題を考えてみるとすれば、シーザーに気づかわれた帝国主義と、ブルータスの抱いていた民主主義と、いずれが人間に幸福をもたらすかという大問題であろう。

4　チェイクウィズの懐疑

シーザーの帝国主義とブルータスの民主主義と、どちらが人間に幸福を齎すか、という問題を『ジュリアス・シーザー』が提出していると考えるよりも、ああいう羽目に陥って、シーザーやブルータスはどういう人であったかということの方に、シェイクスピアは一そうの関心を持っていた、と私は思う。政治の問題ではあるのだ。しかし、抽象的な政治の理念の闘争ではなく、政治的人間の生き方が問題なのである。シェイクスピアのローマ史劇、『ジュリアス・シーザー』や『アントニーとクレオパトラ』や『コリオレイナス』など、みなそういう見地から眺める必要がある。

幸福一般の問題として、二つの主義のいずれが良いかということは、政治学者や哲学者にまかせることにしよう。しかし、ここで、シェイクスピア自身は芝居ではああいうふうに書いているけれども、心中、どちらが人間に幸福をもたらすものだと思っていたであろうかという質問は可能である。何か具体的な証拠が必要だ。それは、セリフの中から捜し出すよりほかない。あるいは劇中人物の扱い方によって推量する、ということもありうるが、シェイクスピアは、ブルータスに対していたわりがある。だから、民主主義が好きで、そこにこそ幸福がはぐくまれるであろうと思っていた、というような大胆なことは、とても言えない。コリオレイナスについても同様である。

同じシーズンに書いた『お好み次第』は『十二夜』とともに名作であるが、日本では、この喜劇の

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo